

龍の国ブータンと国民総幸福(GNH)

坂井華奈子

昨年一月、ブータン国王夫妻が東日本大震災後初の国賓として来日し注目を集めたのは記憶に新しい。特にGNH

(Gross National Happiness: 国民総幸福度/量などと訳される。)という幸福を重視した国のあり方が関心を呼び関連書籍の出版も相次いでいる。GDPのような経済的指標のみでは測ることのできない国民の幸福を目標に掲げ、政策として実践しているブータンとはどのような国なのだろうか。

ブータン王国はインドと中国という大国の間に位置するヒマラヤの小国である。国土は九州程の面積で人口は約七〇万人。公用語ゾンカ語でのドゥック・ユルという国名は「雷龍の国」を意味しており国旗にも龍が描かれている。国教はチベット仏教の一派であるドゥック派とされているが、多民族国家であり信教の自由も保障されている。外界と切り離された桃源郷的な印象があるかもしれないが、テレビとインターネットの解禁は一九九九年であり、伝統を重視しつつも、都市部では近代的なライフスタイルを取

り入れた若者の姿も多いようだ。基礎的文献については本誌二〇〇四年三月号掲載の「照葉樹林の国—ブータン」(http://www.ide.go.jp/Japanese/Library/Search/Shelf/pdf/af_2004_03.pdf)もあわせて参照いただきたいが、本稿ではそれ以降に出版されたものを中心にブータンとGNHに関する資料を紹介してみたい。

総合的入門書として平山修一著『現代ブータンを知るための六〇章』(明石書店 二〇〇五)がある。GNHについても六ページ程とりあげているが、二〇〇八年の政治体制変更など出版後の変化については最新情報を補う必要があるだろう。一〇年ぶりの改訂を経て新版が刊行された辛島昇ほか監修『南アジアを知る事典』(平凡社 二〇一〇)では地域編でブータンの基礎情報も参照でき、項目編ではGNHについて「国民総幸福量」の見出しから引くことができた。

田中敏恵著『ブータン王室はなぜこんなに愛されるのか…心の中に龍を育てる王国のすべて』(小学館 二〇一〇)では、第五代国王来日時のエピソードや国民に愛される王室の背景、大きな隣国との間で独立を保ち、王制から民主化へ移行した経緯などが平易な文章でまとめられている。

鈴木正宗編『南アジアの文化と社会を読み解く』(慶應義塾大学東アジア研究所 二〇一〇)に収録されている宮本万里「仏教王国ブータン」のゆくえ—民主化の中の仏教僧では、独自の伝統文化や仏教の位置づけと民主化以降の政治構造について、政府文書の分析と宗教関係者が排除された新選挙制度に基づく二〇〇七/〇八年度選挙の実態から論じている。

しばしば、ブータンでは国民の九七%が幸福であるというデータが示される。これは二〇〇五年の国勢調査結果(Results of population & housing census of Bhutan, 2005)の世帯別幸福度のうち、とても幸福および幸福という回答を足した数値である。しかしGNHは主観的な幸福度という単一の尺度で測るものではない。また、経済発展を否定するものでもなく、その柱とされる九の領域には社会経済発展に関する項目も含まれている。GNHの

起源や概念についてはThe Centre for Bhutan Studiesが今年四月に刊行した「A Short Guide to Gross National Happiness Index」(http://www.grossnationalhappiness.com/wp-content/uploads/2012/04/Short-GNH-index-final.pdf)が詳しい。二〇一〇年に実施されたGNH調査の結果も収録されており、幸福である(充足度六六%以上)という回答者は調査対象の四〇・八%となっている(同書五ページTableより)。実際には九領域、三三の指標に基づきさらに詳細な分析がなされており、充足度のみでGNHを語ることはできないだろう。しかし五年前の国勢調査との差は注目に値するのではないだろうか。

日本語のGNH関連書籍についても数点紹介したい。大橋照枝著『幸福立国ブータン：小さな国際国家の大きな挑戦』(白水社 二〇一〇)はGNHとブータン社会について多角的な分析を踏まえ総合的に紹介した書籍である。ジグミ・ティンレイ著・日本GNH学会編『国民総幸福度(GNH)による新しい世界へ…ブータン王国ティンレイ首相講演録』(芙蓉書房出版 二

〇一〇)は経済同友会セミナーにおける基調講演の内容と英文資料を収録している。講演録であるためコンパクトで読みやすい。沖繩大学地域研究所編『ブータンから考える沖繩の幸福』(芙蓉書房出版 二〇一〇)は若者、教育、医療、格差などに関する現地調査結果をまとめたものである。GNHの日本への応用を論じた枝廣淳子・草郷孝好・平山修一著『GNH「国民総幸福」：みんなでつくる幸せ社会へ』(海象社 二〇一〇)では、震災後日本での新しい幸福の尺度について示唆している。御手洗瑞子著『ブータン、これぞいいのだ』(新潮社 二〇一〇)は、GNHコミッションで首相フェローとして働いた著者の現地体験に基づく内容であり、GNHの精神や、ブータンから学ぶべきところだけでなく、日本人からするとどう思うか、またまうような感覚の違いなども赤裸々に綴られている。

アジ研図書館では現地資料を含め他にも関連書を所蔵している。ぜひご利用いただきたい。(さかい かなこ/アジア経済研究所 図書館)

*URLの最終アクセスはすべて二〇一二年七月一四日。